

【第45回城戸賞 応募作品】

上辺だけの人

三嶋龍朗

【あらすじ】

若くして有名脚本家となった安達博巳（35）は、女優の麻里（32）と結婚して十年目を迎えるようとしていた。おしどり夫婦と目される二人だったが、その実、その関係は破綻寸前だった。何かを隠すように上辺を取り繕う博巳の態度が麻里を苛立たせ、口論が絶えない。あげく麻里から「あなたのことわからない。心がないみたい」と言われる始末。

近年は、過去作の焼き増しのような脚本ばかりで仕事も減っていた。やっときた映画脚本のオファームも、麻里が主演を務めることを条件としたもの。麻里には隠したまま、その脚本のプロットを書く博巳だったが、題材が夫婦ものであるため普段以上に書くことができな

い。そんな折、かつての恋人であるケンジから電話がある。「エイズを発症した。あなたも、すぐにHIV検査をして」との連絡。若い頃、売れずにくすぶっていた博巳は、年上の男性に、ヒモとして養ってもらっていたのだった。その過去については、周囲は当然、麻里にも隠していた。

すぐに検査を受ける博巳。結果は陰性。胸をなでおろす博巳は、ケンジの元を訪れる。当時はゲイバーを複数経営し羽振りよかったが、今は見る影もないアパート暮らし。咳が止まらず熱もあるケンジは、検査はしたものの治療は開始していないという。すぐに病院へ連れて行く博巳は、ケンジに感謝される。

自宅に戻った博巳は件のプロットを書き始める。『離婚した元妻が病気となり、そのケアをする夫』という夫婦の話。ケンジとのことをネタにした話だったが、プロデューサーの感触はすこぶる良い。

博巳は取材を兼ねて、ケンジの病気のケアをするようになる。そんな思惑があるとは知らないケンジ。

そんなある日、精密検査で、H I Vの合併病である悪性腫瘍が発見されるケンジ。一方で、プロットのべ切も迫り、ケアの両立が難しくなり始める博巳。家を空けることが多くなつた博巳を不審に思う麻里は、博巳が隠れてケンジのケアをしていたことを知る。過去に同性と交際していたことも含め、ショックを受ける麻里。その様子を受け、もうケンジとは会わないと約束する博巳。しかし、麻里はケンジのケアを手伝うという。。

【登場人物】

安達博巳^{ひろみ}（33）脚本家
安達麻里（32）女優°博巳の妻

芸名…伊吹麻里

大塚ケンジ（51）博巳のかつての恋人

堤有紗（25）麻里のマネージャー
吉岡（43）麻里の専属メイク

高野（27）新人脚本家

後藤（41）映画プロデューサー
箱崎（29）後藤の部下

平山（52）エイズ拠点病院の医師

博巳「（その空席を見ている）……」

上の空の博巳を気にしながらトークをし

ている麻里。

司会「今回、脚本に一目惚れして出演を決め

られたというのですが、特にラストシー

ンがお気に入りでそうですね？」

麻里「そうですね。主人公が最後、彼女を追

いかけたのかどうか今もすごい気になって

て。監督は現場でも教えてくれないんです」

監督「（笑って）それは脚本の安達さんに訊い

たほうがいいですよ」

麻里「（博巳を見て）私は、追いかけてほしい

って思うんですけど」

博巳「……」

博巳「博巳は聞いていない様子。」

麻里「あの、安達さん？」

博巳「麻里の問いには答えずに、依然ひとつだ

け空いた席を見ている博巳。」

○授賞式会場・控え室（十年後）

ノートPCのキーボードに指を置いたま

ま固まっている正装姿の博巳（35）。

映画プロット『夫婦（仮）』という題名

だけ書かれた真っ白なワード画面。

少し指を動かしてみるのが、一文字も打て

ない。

スタッフ音がしてスタッフが入ってくる。

スタッフ「奥様の御仕度がおわりましたので、

舞台袖までお願いします」

立ち上がる博巳はPCを畳む。

○授賞式会場

マスコミがひしめく会場。舞台には『い

い夫婦の日、ベストオブリイ夫婦』とい

う看板が飾られている。

○同・舞台袖

司会 「指陣の前、こやかに指輪の入った菓
指を見せる麻里。こやかに指輪の入った菓
指をそれでは旦那様から奥様へ一言お願い
します。」
麻里 「いつもありがとうございます。愛してるよ」
博 「大きな拍手に包まれる会場。」

○博巳の運転する車中（夜）

博巳 「助手席に座る麻里は、がつちりとハマッ
てしまっただけ。さっさと死だ。ハマッ
て無理しないほうがいいよ。さっさとネッ
トで調べたけど石鹸とか糸とか使うと抜け
やすいつて書いてた」
麻里 「（睨んで）……」
博巳 「ごめん。スタッフの人に頼んだサイズ
が間違ってたみたい」
麻里 「あなたが人のせいじゃないに言うの？ あ
なたがサイズを伝え間違えたんだよ」
博巳 「別たいの？ せいでこんな式に出ようと
思っただい？」
博巳 「て、世間もそれを認めてくれたからでし
よ？」
麻里 「愛してたら、もっと関心持つと思うけ
ど」
博巳 「だからごめんって。今度買い直すから」
溜息をつく麻里。
麻里 「……ほんとなの？」
博巳 「なにが？」
麻里 「その、愛してるっていうのは」
博巳 「言いたいの？ 車線変更のため後続車を気
にしている博巳。」
麻里 「（それを見て）……もう十年も一緒なの
に、あなたのこと全然わからない」
博巳 「心がないみたい」

博巳「……」
指輪の外れない麻里の薬指は鬱血して紫色になつてゐる。その指を横目で見る博巳。

○メインタイトル「上辺だけの人」

○安達家のあるマンション・表（翌朝）

都心にそびえるタワーマンションが朝日を浴びてゐる。

○同・寝室

夫婦別のベッドで目を覚ます博巳。麻里はまだ寝ている。

○同・ベランダリビング

コーヒーを片手に、階下をのぞく博巳。マンション前に駐車している白いアルファードが見える。運転席から降りてきた堤有紗（25）と目が合い、軽く会釈し合う。起きてきた麻里が慌ただしく、支度を始める。

博巳「堤さん、もう待ってるよ」

と、伝える博巳は、タンブラーを渡す。麻里「（受け取りながら）わかってる」

台本をカバンに入れると、そのまま出て行く麻里。残される博巳。リビングには、二人の出会いのきつかけになつた低予算映画のポスターが飾られてゐる。

○堤の運転する車中

堤「毎朝、見送ってくれるなんて、ほんとイ旦那さんですよね」

高博
野巳
「人博
ありが脚
とうが本
ござ家が
います野
す」(座(高
りな(野
がら)読
読んだ(こ
だよ、ん)だ
新しいよ、よ
しい稿」が
既
に
店
内
に
い
た
新

○喫茶店

博巳
「ねそも
：？の一流
：中敵
：宣に
兼伝
ねなん
てか
』の映
とい画
う話
投稿も
あり
。や
「入素
力し
、エ
ゴサ
を開
く
と
、
』安
達
博
巳
』と
Sの賞
式
の
ユ
ー
ン
を
見
る
ユ
ー
ン
博
巳
は
、
ス
マ
ホ
に
の
授賞式
の
様子
を
見
る
博
巳
は
、
ス
マ
ホ
に
の
電
車
内
に
み
る
博
巳
は
、
ス
マ
ホ
に
の
流
し
読
み
の
小
さ
く
脚
本
が
表
示
さ
れ
て
い
る
博
巳
は
、
ス
マ
ホ
に
の
座席に座
つてスマ
ホを見
ている博
巳は、

○電車内

麻堤 麻堤 麻堤 麻堤 麻堤
里た ー里な ーも里 ーご里えと ー
「のん ーらお浮 ー：い ーてきイ
そが ー何問か もれD イつし妻
はでん仮 °に題か さ、てV らてたの
機たの夫か ないな嫁な いれい？、会
嫌つよ婦 ーいじい姑 °で問 °てよ 理話
そけく ーないが なく題D る？D 想を
う？い ーんい で問 ーいさ、どで
にとる ーじシす 題でさ、い何こ
コ笑 ーやヤ °レい ーんか °もか？
ーうや ーんい ーで °何に ーか？
ヒ堤 ー °」に い ーで °何に ーか？
をすす ーなん ーい ーも ーハ
すす ーない ーい ーハ
しし ーい ーハ
」

博 ーちよと表面的過ぎるね。見たことある。シチュエーションも処するのばっかりだ。ほ
 うがいよ。死にても処理するの止めたほ
 博 ー高野は必死にメモを取っている。
 高野 ー「は心で書かないとやっ
 博 ー「本局で書かないとやっ
 高野 ー「すのままだと、脚本監修で僕をクレジ
 ー
 博 ー「の仕事場のアパート・表
 ー
 閑静な住宅街にある小綺麗なアパート。
 同・室内
 1 2 畳ほどの広いDK。本で埋まった
 資 料 や 今 手 け た 脚 本 で 埋 ま っ た
 大 き な 本 棚 が 置 か れ て いる 。 P C に 向 か っ て
 デ ス ク 博 巳 。 置 か れ た ノ ー ト P C に 向 か っ て
 い る 博 巳 。 夫 婦 (仮) 『 』 と い う 題 名
 映 画 プ ロ ッ ト 『 』 夫 婦 (仮) 『 』 と い う 題 名
 だ け 書 か れ た 真 白 な ワ ー ド 画 面 。
 前 回 か ら 全 っ て 進 んで いない 。 画 面 。
 夕 方 に な っ て いる 。 真 っ 白 な 状 態 。
 画 面 は 依 然 変 わ ら ず の 真 っ 白 な 状 態 。
 も や や う な だ れ づ の 博 巳 。
 ス マ ホ に メ ー ル が 届 っ ち ゃ ない 。 藤 村 だ
 見 る と プ ロ ー サ ー の 後 藤 村 だ
 明 日 1 3 時 の プ ロ ー サ ー の 打 ち よ ろ し く
 お 願 い し ま す 。 博 巳 は 意 図 した よ う に 立 ち
 溜 息 。 博 巳 は 意 図 した よ う に 立 ち
 上 が る 。 博 巳 は 意 図 した よ う に 立 ち
 外 付 け ハ ー ド デ ィ ス ク を 持 っ て 来 た 博 巳
 P C に 繋 ぐ 。 デ ィ ス ク を 持 っ て 来 た 博 巳

中から、『没プロット』と書かれたフオ
ルダを選択する。
たくさんの没プロットを確認し、選び始
める博巳。

選んだプロットの題名を『夫婦（仮）』
に変更すると、それをメールに添付し、

博巳「送信する。」
窓外はもう暗くなっている。

○映画制作会社・表（翌日）

都心に自社ビルを持つ大きな会社。

○同・打ち合わせ室

お茶を飲みながら待つている博巳。
プロデュサーの後藤（トコ）と部下の箱

後藤「お疲れ様です。ニューズ見ましたよ、
賞おめでとうございませう。」

後藤「打ち合わせ先、配給会社でも話題にな
ってまして。今、安達さん脚本、麻里さん

博巳「それも、それありきの企画ですよ。」
「めちゃくちゃ食いついてましたよ。」

後藤「いやいや、そんなときないですけれど、ま
あ、麻里さんの事務所に軽いですしね。」

後藤「そうですね。」
「そうですか。」

博巳「そうですか。」
「そうですか。」

博巳「そうですか。」
「そうですか。」

博巳「そうですか。」
「そうですか。」

博巳「そうですか。」
「そうですか。」

ノートPCの前で頭を抱えている博巳。
その時、PCの音が着信する。『ケンジ』とある。
画面の着信表示は『ケンジ』とある。
驚く博巳。『表示は』とある。
電話を取れずにいると着信が鳴り止む。
画面には『留守番メッセージが一件』と
表示されておる。おそるおそるメッセージを聞いて
博巳、おそるおそるメッセージを聞いて
みる。『おそるおそる』とある。
ケンジの声「久しぶり。急にごめんなさい。
どうしても伝えなきゃいけないことがあるも
の。アタシ、エイズ発症したの。あんたも
念のため検査を受けて」
博巳「……」

○性病専門クリニック・待合室（翌日）

待合客が数人、長椅子に座って待っている。
その中に紛れて、マスクにサングラス、
ニット帽をかぶった博巳もいる。
博巳「（気が気でない）……」
受付の看護師に番号で呼ばれた博巳は診察室に向かう。

○同・診察室

匿名希望と書かれた問診票を見ている医
師。検査動機の項目、『元パートナーが
エイズを発症した』にチェックがされて
いる。
医師「元パートナーの方は異性ですか？ 同
性ですか？」
博巳「同性です」
医師「最後の性行為の時期はいつ頃ですか？」
博巳「十年ほど前です」
医師「HIVに感染すると、数年から10年
後にエイズを発症することが多いです。連

博医博
 と師巳
 仰「さあ診
 ことさき察
 でまほ室
 すかどに
 かした、戻
 けど、悲つ
 、観覲て
 最悪の観
 場合もあ
 るとい
 っが

博医
 巳師
 「(安「あ
 堵感がの
 広がっ
 ていく」

飛び跳ね
 ばかりの
 勢いで診
 察室から
 出

検査結果
 の紙を見
 せる医師
 。検査結
 果の

医師「い
 る。医
 師は手元
 の資料を
 ペラペラ
 とめくっ
 て

○同・診察室

待合室で
 祈る博巳
 。他の待
 合室の番
 号が呼ば
 れるなか
 、つい

○同・待合室

看護師「お
 待ちはい
 くらさ
 い」

採血を受け
 た後、採
 血管が
 出ま
 すので
 待合室

博巳「あ
 の、ちよ
 っとお訊
 きした
 いん
 ですが

医師「あ
 の、ちよ
 っとお訊
 きした
 いん
 ですか

絡して
 くれた
 方の判
 断は賢
 明です
 ね」

トロル
 と出
 来ても
 慢性疾
 患にな
 りまし
 たので、

要あり
 ませ
 んよ

医師「状況次第では当然ありますよ？」

○同・表

ケンジの留守電メッセージをもう一度聞
いている博巳。ケンジは咳込んでいる様子。
よく聞くとケンジは

○博巳の仕事場のアパート・室内

PCの前でプロットを書こうとしている
博巳だが、机に置かれたスマホが気がか
りで集中出来ない。
博巳「仕方なくケンジに電話をかける博巳。」

○ケンジのアパート・表（翌日）

都心から少し外れた場所に位置する古い
アパートの前にタキシードを着た博巳は、みすぼらし
いタクシートを見ている。怪訝な表情。
ケンジの部屋の前。×

博巳「その顔は、久しぶり」と頬がこけている。

○同・室内

物がごちゃごちゃと置かれた六畳間。
小さなテーブルで向き合うように座って
いる博巳とケンジ。

ケンジ「（号泣）本当に、本当によかった。も
配しあんたに病気がうつしてたらと思ったら心
で眠れなくて……」

ケ博
ン巳
ジ「記具
「今入合
遠、し悪
の何てい
1？るケ
6「博ン
歳巳ジに
」°。変
わっ
て、
問診
票に

○ケ
ンジ
の
か
か
り
つ
け
の
診
療
所
・
待
合
室

タク
シ
ー
が
停
ま
っ
て
い
る
°。
乗
り
込
む
支
え
る
よ
う
に
し
て
、
タ
ク
シ
ー
に
行
き
先
を
伝
え
、
出
発
す
る
タ
ク
シ
ー
°。

○同
・
表

ケ博
ン巳
ジ「ケ
ン
：
：
：
ん
？
」
電
話
を
か
け
る
°。
か
か
り
つ
け
の
病
院
ど
こ
？
」
ス
マ
ホ
を
取
り
出
す
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に
博
巳
：
：
」
博
巳
°。
か
な
り
の
高
熱
°。
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に

ケ博
ン巳
ジ「ケ
ン
：
：
：
ん
？
」
電
話
を
か
け
る
°。
か
か
り
つ
け
の
病
院
ど
こ
？
」
ス
マ
ホ
を
取
り
出
す
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に
博
巳
：
：
」
博
巳
°。
か
な
り
の
高
熱
°。
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に

ケ博
ン巳
ジ「ケ
ン
：
：
：
ん
？
」
電
話
を
か
け
る
°。
か
か
り
つ
け
の
病
院
ど
こ
？
」
ス
マ
ホ
を
取
り
出
す
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に
博
巳
：
：
」
博
巳
°。
か
な
り
の
高
熱
°。
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に

ケ博
ン巳
ジ「ケ
ン
：
：
：
ん
？
」
電
話
を
か
け
る
°。
か
か
り
つ
け
の
病
院
ど
こ
？
」
ス
マ
ホ
を
取
り
出
す
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に
博
巳
：
：
」
博
巳
°。
か
な
り
の
高
熱
°。
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に

ケ博
ン巳
ジ「ケ
ン
：
：
：
ん
？
」
電
話
を
か
け
る
°。
か
か
り
つ
け
の
病
院
ど
こ
？
」
ス
マ
ホ
を
取
り
出
す
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に
博
巳
：
：
」
博
巳
°。
か
な
り
の
高
熱
°。
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に

ケ博
ン巳
ジ「ケ
ン
：
：
：
ん
？
」
電
話
を
か
け
る
°。
か
か
り
つ
け
の
病
院
ど
こ
？
」
ス
マ
ホ
を
取
り
出
す
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に
博
巳
：
：
」
博
巳
°。
か
な
り
の
高
熱
°。
博
巳
は
タ
ク
シ
ー
会
社
に

博 ン 巳 「そうい
うのいいから」

「記入していき
博巳の項目がある。
少あり迷った博巳は、
H I V 陽性と記入す
る。」

看 護 順 番 を 待 っ っ っ っ × × × ×
ケ ン ジ は 寝 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
た 師 付 き 添 い の 方 だ け 、 こ ち ら に 来 て い
博 巳 「？」

○ 同 ・ 別 室

院 長 「診察室とは別の部屋。
博 巳 「え？」

院 長 「エイズ拠点病院がありま
すので、そち
ら へ 向 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
博 巳 「？」

院 長 「よう、彼はここを長
年かかりつけにして
だ け け け け け け け け け け け け
博 巳 「？」

院 長 「（悪びれず）そ
うです」
憤 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
博 巳 「？」

○ 同 ・ 待 合 室

ケ ン ジ 「？」
ぐ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
博 巳 「？」

○ エ イ ズ 拠 点 病 院 ・ 表

大きな大学病院。

○同・血液内科・診察室

平山「付き添う博巳。医師の平山（52）の診察を受けているケ

ね。咳と熱の原因は肺炎を併発して

とね。抗菌薬で対処していきまじやう。抗HIV薬

博巳「抗菌薬で対処しては死ぬ病気がなくなっ

たとえ聞いた発症しても本気で飲めば、健

常者と変わらない生活を送ることか？

平山「私の変わらない生活を送ることか？

す。私の患者では発症してからも20年経つ

方もいらっしゃいます。とでも元気な方で

旅行の度に土産をくれる。タペストリー。

ケン「診察室に貼られた多くのタペストリー。

平山「医師はケンジの首元のリンパ節を触る。

で、後日、再検査に来ていた。だきたいです」

博巳「ケンジ」

○同・タクシー乗り場

博巳「立ってタクシーを待っている。その博

巳を見ている。ベクシに座って、その博

現れたタクシーにケンジを乗せる博巳。

ケン「それじゃ薬忘れずに飲みなよ？」

博巳「ドアから離れようとする博巳。

ちよつと、と呼び止めるケンジ。

博巳「？」

ケン「（そっけなく）今日はありがとう」

博巳「？」

博巳「？」

○安達家のあるマンション・リビング（夕方）

ケンジン「サボっちゃった」で再検査の予定だったけど、
 博巳「立ち上がる病院長、レックの予定だったけど、
 ケンジン「全良くなかったよ、おかげで逆に体調が
 悪くなるって矛盾よ、おかげで逆に体調が
 博巳「で、免疫力が戻ったよ、おかげで逆に体調が
 ケンジン「全然良くなかったよ、おかげで逆に体調が
 博巳「見ると、39℃を表示している。
 音を発する。挟まった体温計がピピッと
 ケンジン「再び、布団で横になっただけで、ケンジンと
 再び、布団で横になっただけで、ケンジンと
 差し入れを持った博巳だ。
 き穴を見ることが出来る。ケンジは、玄関の覗
 辛そうに立ち上がる。ケンジは、玄関の覗
 インターホンが鳴る。
 具合悪そうに、布団に横になっているケ
 ンジン。ホーンが鳴る。
 博巳「コロコロ片手に振り返る博巳。
 麻里「（見かねて）全然集中出来ないね？」
 博巳「ソファには珍しく集中してたのに」
 麻里「（見ている）……」
 博巳「カーペットに落ちているホコリが気にな
 ったのか、最終的にコロナを始める
 麻里「（見ている）……」
 博巳「パソコンを置いて、リビングをウロウロ
 しているが、指が動いていない。PCに向かっ
 博巳「麻里は、リビングのソファでPCに向かっ
 麻里「アイランドキッチンで料理を作っている
 博巳「は、キッチンを見て料理を作っている
 麻里「は、キッチンを見て料理を作っている」

○ケンジのアパート・室内（翌日）

× けケ朝ケ
× 準ジはジ
× 備がんの
× をしをア
× いてケ
× いるにト
× 博間、意
× 巳。慌す
だ博巳。
出

○博巳の介護の点描

麻里
「ブテ博リ
「ラ―巳が
「―ブルい
「―置のな
「―いては
「―ある。コ
「―ヒーの
「―の入った
「―タン

○安達家のあるマンション・リビング（翌朝）

博ケ博ケ博ケ
巳ン巳ン巳ン
「ジ―ジ―ジ
「―い―：―
「―ろそ―：―
「―いれよ―
「―ろはか―
「―心あつた
「―配だが一
「―助かしたい
「―か―けに
「――ど行こ
「――い―か
「――の？―
「―？―

ケ博ケ博ケ博
ン巳ン巳ン巳
「ジ―ン―ジ
「―そな―何
「―とにもケ
「―レト来る
「―のトよう
「―話をか
「―を―する
「―食べるケ
「―ンジ。

独居老人の

アパートの表にタクシーが停まってい
 る。パーティの部屋から連れ出し、タクシーに
 乗せる。博巳。屋から連れ出し、タクシーに
 エイズ拠点病院。×
 造影剤の点滴を打ち、CT検査を受ける
 ケンジ。×
 診察室。×
 医師が生検用に腫れているリンパ節の
 一部を抽出し、吸引する。×
 痛そうにケンジ。×
 病院の会計受付。×
 支払いをしようとした博巳は、明細に記
 載された6万円という額に驚く。×
 保険適用で、その額を支払いを済ませる
 博巳。×
 博巳の職場のパーティ。×
 博巳のPCで調べると、障害者手帳
 の取得に付いて調べている。×
 障害者手帳が認められて、区助成してくれ、
 患者は少額の負担で済むとホームペー
 上に記載されている。×
 スーパー。×
 スーパーでレシピアを見ながら、食材の買
 出しをしていく。博巳。×
 ケンジのアルバイト。室内。×
 食事のあと、薬をケンジに渡す博巳。
 薬は10種類ほどある。×
 ○ケンジのアパート・室内（夜）
 寝ているケンジ。博巳は、本棚にあるア
 ルバムを見つけていた。博巳は、本棚にあるア

堤里「ごめんなさい、私にはわかりません」

○ケンジのアパート・室内

病院にしかける準備している博巳。

顔色も少し良くなってきたケンジがスマ

ホを見ている。『2010年、女優の伊吹

ケンジ「……奥さんとは上手くいってるの？」

博巳「まあ普通だよ」

ケンジ「大事にしなさいよ。人間ひとりで生

きていけると思ったら大間違いだから」

博巳「ケンちゃんと言うながら再びスマホに目を落

とすケンジ。映画やテレビの脚本作品が

ウイキには、映画やテレビの脚本作品が

羅列されている。その脚本家として華や

ケンジ「あな、すごい脚本家のねえ」

博巳「別にあな、すごい脚本家のねえ」

ケンジ「書いたものなんてほとんど

ないから」

博巳「それ、食べて寝るだけの病人みたいだつ

たあんたが、売れっ子脚本家になるなんて。

博巳「母も養ったんだから、それぐらい

ケンジ「4年も釣りがくるでしょ？」

博巳「そんなこと言うて、俺の初めての作品

の上映にきてくれなかつたじゃんか？」

ケンジ「男の恋愛モノなんて、観ても寂し

博巳「はいはい。もう行くよ」

○エイズ拠点病院・診察室

平山「CT画像を見ている医師の平山。平山の前にはケンジが座り、その後ろに博巳も付き添っている。」

平山「首のリンパ節に腫瘍が見つかりました。悪性リンパ腫です」

ケンジ「（愕然として）……」

平山「いわゆる血液のガンとよばれるもので、

HIV患者の方が併発しやすい病気です」

平山「CT画像の黒い影を指す平山。

「発見できたことは幸運と言え、早くに

今日から入院していきなさい、抗がん剤治療を行なう間、終始ケンジは俯いている。

博巳「説明の間、終始ケンジは俯いている。」

○同・病室

看護士「ベッドに座っているケンジ。

看護士「抗がん剤の準備をしますので、着替

えてお待ちください。」

ケンジ「は着替えようともせず、俯いたま

ま。ケンジは病室を出て行く看護士。

博巳「はやく見つかってよかったです。」

ケンジ「はやく見つかってよかったです。」

博巳「はやく見つかってよかったです。」

ケンジ「はやく見つかってよかったです。」

博巳「はやく見つかってよかったです。」

ケンジ「はやく見つかってよかったです。」

博巳「はやく見つかってよかったです。」

ケンジ「はやく見つかってよかったです。」

博巳「はやく見つかってよかったです。」

ケンジ「はやく見つかってよかったです。」

博巳「はやく見つかってよかったです。」

ケンジ「はやく見つかってよかったです。」

博巳「はやく見つかってよかったです。」

ケンジ「はやく見つかってよかったです。」

博巳「はやく見つかってよかったです。」

ケンジ「はやく見つかってよかったです。」

博巳「はやく見つかってよかったです。」

博 博
「 : :
 : :
」 「 : :
 ン ジ と 博 巳 。 抗 が ん 剤 の 点 滴 を 受 け て いる ケン ジ 。
ポ タ ポ タ と 落 ち る 抗 が ん 剤 を 見 て いる ケ
ン ジ と 博 巳 。

○ 映 画 制 作 会 社 ・ 打 ち 合 せ 室 （ 翌 日 ）

後 藤 「 基 本 的 に は す ご く い い と 思 う ん で す よ 。
そ の 前 に は 博 巳 。
プ ロ ッ ト の 打 ち 合 せ 。
プ ロ ッ ト を ペ ラ ペ ラ と め くる 後 藤 。

後 藤 「 た だ 、 こ れ 、 最 後 に 元 奥 さ ん の 病 気 が 治 る
つ の が 、 ち ょ っ と 。

後 藤 巳 「 ち ょ っ と ？ 」
後 藤 「 悪 く 言 う と 都 合 な っ て 。 ハ ッ ピ ー

箱 崎 巳 「 エ ン ド 過 ぎ る っ て い う か 」
箱 崎 「 箱 崎 も 、 う ん と 頷 い て いる 。
「 助 か ら な い ほ う が い っ て いる 。 」

後 藤 「 っ て 思 っ ち ゃ っ た ん で 」
箱 崎 「 ま あ 。 僕 も 読 ん だ と き 、 『 あ 、 治 る ん だ 』 」

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 一 回 、 そ の パ タ ー ン で 考 え て み ま せ ん

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 ？ 」

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 ？ 」

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 ？ 」

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 ？ 」

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 ？ 」

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 ？ 」

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 ？ 」

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 ？ 」

後 藤 巳 「 ？ 」
後 藤 「 ？ 」

博巳「……わかりました」

夜 ○博巳の職場のアパート・室内（日替わり）

博巳「打ち合わせのメモを確認している博巳。」

をパソコンに書き進めよう博巳は、

一息つく博巳は、カレンダーを見る。

明日は、ケンジの検査日だ。

○堤の運転する車中（夜）

麻里「（出て）どうしたの？」博巳だ。

博巳「作業するよ」

麻里「わかつた」

博巳「なに？」

博巳「……いや、なんでもない。また今

博巳「電話が切れる。」

堤「今の博巳さんで話しかけてくる。」

堤「他になんかいって？」

堤「あれ？？」

○安達家のあるマンション・リビング（夜）

麻里「いえ、なに？」

麻里「……何でもないです」

麻里「……おかしいなあ」

麻里 「(考えを巡らして) ……」

麻里 「その病院で度々買いは、最寄駅でもないスーパード」

麻里 「その病院長、多額の治療費を払って、明細には、病院で6万」

○博巳の仕事場のアパート・表の道(翌日)

麻里 「(考えを巡らして) ……」

麻里 「その病院長、多額の治療費を払って、明細には、病院で6万」

○エイズ拠点病院・表の駐車場

麻里 「その病院長、多額の治療費を払って、明細には、病院で6万」

○同・中

をなんとか博巳を見つけ、そのまま病院内

ケン 再度、驚くケンジ。
ケンジ「(慌てて) あ、ああ。はじめまして。

大塚です」
麻里は博巳を見ている。

ケン 博巳は俯いている。
ケン「(無理な男口調で) オレ、ちよつと体

壊しちゃって。博巳君は昔の馴染みで、よ

く見舞いに来てもらってるんです」
麻里「主人の様

子が変なので、心配で後を尾けてしまった様

で「」
ケン「」

ケン「」
ケン「」

ケン「」
ケン「」

ケン「」
ケン「」

ケン「」
ケン「」

ケン「」
ケン「」

ケン「」
ケン「」

ケン「」
ケン「」

○ 同・表

病院から出てくる麻里。
その少し後ろをついて歩く博巳。

駐車場に停めた車の傍までやってきた麻

里は、鞆の鍵を探している。

追いつく博巳の鍵を探している。

麻里「(鍵を探しながら) だって、あの人が、ゲ

イで「」
麻里「」

で「」
麻里「」

で「」
麻里「」

博 麻博
里 里 巳
「昔、付き合ってた人だよ」

博 巳
「最近、病気がなかった頃、養ってもらってた。それで

で、看病してた」

鍵が見つかり、車のドアを開ける麻里。

車を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

○安達家のあるマンション・リビング（夕方）

麻里の姿はない。

椅子に座る博巳は、スマホを取り出し、

麻里に電話をかける。

○同・地下駐車場

車に乗った麻里が呆然としている。

スマホが着信。博巳からだ。

無視する麻里。

「……」

○安達家のあるマンション・リビング（夜）

頭を抱えている博巳。

玄関から物音がする。

「麻里がリビングに入ってくる。」

「（迎え受け）……」

「あなた、今も男の人が好きなの？」

「いや。それに、男と付き合ったのはケ

博 巳

麻里「さよ」
博「私も手伝うし」
麻里「そう言い残すと寝室へ向かう麻里。」
呆気に取られる博巳は麻里を追う。

○同・寝室（夜）

博巳が寝室に入ると、麻里は寝間着に着替えている。
博巳「今の本気？」
麻里「本気で？」
博巳「あなた、今、仕事忙しいんでしょ？」
麻里「そうですね、いいじゃない？」
博巳「ただ、寝る。電気消して」
麻里「立っ？　だっ？　もっ？　横になり布団をかぶる麻里。」

○エイズ拠点病院・病室（日替わり）

平山「医師、平山の回診を受けているケンジ。」
ケンジ「問題ありません。予定通り、一時退院。」

平山「2回目の抗がん剤治療は一週間後です。治療の影響で高い熱が出ることもあります。周りも気遣ってあげてください。」

博巳「付き添う博巳に伝える平山。」
ケンジ「神妙な面持ちの博巳。」

○タクシー車内

ケンジと博巳、タクシーに乗っている。

ケン ジ「(姑のようによ。芯まで火が通らないしちゃっ

ケン 取りつけわかるといいますか、面取りしないでさっ

ケン 鍋が吹き止めるほど、火を止めておきなついでにさっ

ケン 10年前のあの吹きこぼれてるよ。慌て

麻里「とふん、そのよ。アイツの東京のお母

ケン ジ「ふん、そのよ。アイツの東京のお母

ケン ますし「け、どに住まわせ、養って、自分が高級マ

麻里「昔、ケンに聞いたの？」

ケン じゃ「大體のこ聞いた？」

麻里「あんまり、聞かなくて、結構ですよ。主人

ケン り「ゆくと、聞かなくて、結構ですよ。主人

麻里「すぐ聞かなくて、結構ですよ。主人

ケン たら「器と調味料の場所からなかつ

麻里「(気になる).....」

ケン て「その後、調理がそわそわしながら見

〇ケン ジのパート・室内

麻里「い、俺は「このまま打ち合わせに行かない

博巳「頑張りなかつから、ま打ち合わせに行かない

博巳「張つてから、ま打ち合わせに行かない

残されたケン ジとクシ「が出發する。

麻里「(イライラ)……………」

ケン 出来上がった料理を並べる麻里。×

ケン ジー「いただきます」

ケン 煮物を口に運ぶケンジ。

ケン ジー「……」

麻里「(イライラ) お口に合いませんか？」

ケン ジー「あ、ちがうの」

麻里「？」

ケン ジー「抗がん剤の影響ね。食べ物が苦く感
ほとんと言いで、箸を置くケンジ。料理。」

○ケンジのアパート・玄関(夕方)

麻里「……」

ケン ジー「……」

麻里「……」

ケン ジー「……」

麻里「……」

ケン ジー「……」

○駅前・道(夕方)

麻里「……」

○駅前・道(夕方)

麻里「道を歩く麻里。」

小さな本屋があることに気づく麻里。
中へ入ってみる。

○安達家のあるマンション・リビング（夜）

博巳 帰宅する博巳。

麻里 「おたかいま」
「麻里は何冊かの本を広げ、熱心にメモを

取っている。題名は『抗がん剤と食事の工

夫』。

博巳 「（それを見て）……」

○ケンジのアパート・玄関（日替わり）

ドアを開け、玄関から顔を出しているケ

ンジの前には麻里。

驚くケンジにまた来るとは思わなかったわ

麻里 「スリーパーンの袋を見せる。」
「微笑む麻里は

○ケンジのアパート・室内（日替わり）

キッチンで調理している麻里。

麻里は丁寧に汁を取っている。
その姿を少し離れたところで見ているケ

ンジ 「……」

ケンジの前料理を並べる麻里。

ケン 「……」

ケン 「……」

その姿を見て安堵した表情の麻里。

○安達家のあるマンション・リビング(夕方)

ケン「どうやったの、これ」
麻里「昆布汁で味付けしたんです。抗がん剤の副作用で、醤油と塩に苦味を感じるんですけど、よくあるみたいだから」
ケン「わざわざ調べたの？」
麻里「負けず嫌いなんで」
ケン「あなた、いい根性してる」
麻里「並の根性じゃ女優は務まりませんから」
ケン「綺麗に完食された食器。博巳も喜んでしょと？料理の上手な奥さんで」
麻里「さあ。どうでしょうね」
ケン「洗いながら」
麻里「好き嫌い？」
ケン「トマトでしょ。かぼちゃ、ピーマン。まあ、いろいろあったわ。あなたも困るでしょ？」
麻里「基本、子供の舌なのよ。カレーを出す喜びし。アホっぽいわよね」
麻里「あ、教えてあげるといいわよ」
麻里「いや、教えないです」
麻里「男なんて胃袋と脳みそが直してる生き物なんだから、こういうのは大事なよ」
麻里「隣に座らせるケンジは、紙にレシピを書いて教える。ケンジは、

何かを探しながら廊下を走ってかまわず走つていく。護師が注意するも、走つて立ち止まる博巳。目の前には病院内にあ
 る入院患者用の理容室。急に入店した博巳に驚く店主。急に来店は、医療用ウイッグの販売も行って
 いる。(店主に) あ、男性用のウイッグって
 店主「ありあすか!」
 博巳「短い髪の毛のウイッグには、男性用ウイッグの髪が指さす先には、いかにも男性っぽ
 い短髪や、このウイッグのじゃなくって!」女性
 博巳「ウイッグの男性サイズとかないんです
 店主「!?」
 麻里「博巳が博巳を探して廊下を歩いている。博巳が店主に掛
 け合つて聞いている。片手に、博巳が店主に掛
 ないこれでいいの?」長さで、大きめサイズと
 店主「さすか!」
 麻里「押し問答を繰り返している博巳。困ってしまつ
 必死に食い下がる博巳に、
 ている店主の腕が掴まれる。
 その博巳の腕が掴まれる。
 博巳「振り返る博巳。麻里だ。
 麻里「私に任せなさいよ」
 博巳「」
 同・駐車場
 〇同・駐車場
 駐車が後部座席に乗り込む博巳の車。
 ケンジが後部座席に乗り込む博巳の車。

麻里「博巳と麻里も乗り込む。ちよつと寄り道していき

ケン「せんか？」

ケン「麻里は答えず微笑むだけ。」

○スタイリスト会社の入ったビル・表

ケン「その青山にあるモダンなビル。」

麻里「ほら、催促され車を降りるケンジ。」

○同・室内

麻里「引張られ、スタイリスト会社へ通されるケンジ。男性スタイク室へ連れて行かれる。大きなスタイクの吉岡（吉岡）が待っている。」

吉岡「もー、いくらなんでも急過ぎじゃない？」

麻里「どうせ暇してたんでしょ？ 社長」

吉岡「社長はやめて削られるの？」

ケン「面食らうケンジは、借りてきた猫のよう

麻里「この人、私の専属メイク。いつの間に

吉岡「青山に会社構えや経営手腕がすごいだけ」

麻里「（無視して）用意できた？」

吉岡「（室外に呼びかけ）全部持ってこさせてる。」

麻ケ 麻ケ 麻ケ 麻ケ
 里ン 待里ン 出里ン 里
 「ジ さ 「ジ た 「ジ 「麻 ウ
 や 「れ あ 「の 結 「ね 里 イ
 っ さ て れ そ つ 構 な え が ッ
 ぱ れ な の り て 前 に 、 ベ グ
 り た か 舞 や 知 に ? ひ ン を 被
 「 わ っ 台 、 っ 、 「 と チ っ 被
 よ た 挨 ね て あ の 聞 座 っ た
 、 ? 拶 え る 人 が 書 いた 映 画 に 私 が
 行 かな け ン ジ さ ん 、 招

○ エ イ ズ 抛 点 病 院 ・ C T 室 前 (日 替 わり)

博 巳
 「サ 中 そ つ 寝 博
 : イ に れ い 室 巳
 : ズ は は に に 、
 「 の 、 リ 見 あ 何
 合 い ン つ る か
 わ い グ け る 棚 を 探
 な 夫 ケ ー 博 ゴ し て
 指 の ス 巳 。 ゴ ソ と 探
 輪 日 だ 。 プ レ ゼ ン ト し た
 が 入 っ て いる 。

○ 安 達 家 の ある マ ン シ ョ ン ・ 寝 室 (夜)

博 巳
 「麻 助 運
 : 里 手 転
 : 。 席 し て
 「 には いる 博 巳 。
 疲 れ て 眠 っ て し ま っ て いる

○ 博 巳 の 運 転 す る 車 中 (夕 方)

ケ 麻 ケ
 ン ん 里 ン こ
 く だ 「 ジ け
 の メ : 「 ン :
 泣 く の イ : だ
 そ う の を が そ ん な
 笑 麻 里 。 我 慢 す る け ン ジ 。 や な い の せ っ か
 そ の や り と り を 見 て いる 博 巳 。

ケンジ「やっ？」

ケンジ「よ？」

ケンジ「スキリした」

麻里「あの日に満員の観客のなか、一番いい席だけが見てたの。あの人は、その席

をずっと見てた」

ケンジ「モヤモヤしてた。それこそ10年間ず

っと。あの日に来てくれたらモヤモヤせず

に済んだ」

ケンジ「悪かったわね」

麻里「ま、今こうやって話せてるからいいけ

どね」

ケンジ「看護師が来て、「お待たせしました、中

へどうぞ」とケンジに伝える。

ケンジ「これから長い付き合いになるんだか

ら覚悟しなさいよ」

と、言い立ち上がるケンジはCT室に入

る。微笑む麻里。

○同・CT室

ケンジ「筒状の機械の中、横たわるケンジ。

CT撮影を受ける。

横たわるケンジ。

○安達家のあるマンション・リビング（夜）

麻里「夕飯を作っている麻里。

そこへ、博巳が帰宅する。

麻里「おかえり」

博巳「ケンジさんの腫瘍ね、小さくなった」

麻里「そっか、よかった」

博巳「すごく喜んでた。最後の抗がん剤治療

のあと、また検査だった」

麻里「うん」

博巳「夕飯までもう少しだから、先にお風呂

入ったら？」

麻里「うん」

博巳「夕飯までもう少しだから、先にお風呂

入ったら？」

麻里「うん」

博巳「夕飯までもう少しだから、先にお風呂

入ったら？」

麻里「うん」

博巳「夕飯までもう少しだから、先にお風呂

入ったら？」

麻里「うん」

博 巳 「うん」

博 巳 「料理に」

博 巳 「あ、のさ」

博 巳 「ん？」

博 巳 「明後日の夜って何か予定ある？」

博 巳 「別にないけど」

博 巳 「どこか出かけない？」

博 巳 「：：いいけど」

博 巳 「：：さしよ。あ、お風呂入るよ」

博 巳 「そ、くさとう風呂場へ向かう博巳。」

博 巳 「驚いている麻里は、少し嬉しそうに料理

に返る。」

○ ブティック（日替わり）

高級ブランド店にて、麻里が店員に服を見立ててもらっている。

○ 駅前・ジュエリーショップ

博 巳 が店内に入っていく。控えの紙を渡すと、店員が奥からリングケースを持ってくる。

○ 安達家のあるマンション・リビング（夜）

よそ行きの服を着た博巳がソファに座っている。ポケットからリングケースを取り出し、中身を確認しようとする。ちようど麻里が寝室から出てくる。慌ててポケットへしまふ博巳。

麻 里 「おまたせ」

麻 里 「おまは綺麗に着飾っている。」

博 巳 「（見惚れて）……」

麻 里 「なんか言うことないの？」

博 巳 「あ、ステキだよ」

麻 里 「（笑って）あなたもね」

○ タクシー・車内（夜）

麻里「だから、この間はごめん。心がないな

博「ん：言：つ：て：」

麻里「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る：」

博「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る：」

○安達家のあるマンション・寝室（翌朝）

夫婦別のベッドで目を覚ます博巳。

麻里はまだ寝ている。その寝顔を見る博巳。

○電車内

座席に座っている博巳。

○博巳の仕事場のアパート・室内

P Cの前で作業している博巳。

プロットを無心に書き進めている。入りに書き終わりに『おわり』の文字を

その表情は浮かばず博巳。

博巳「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る：」

文章が段々と消えて行く。

○エイズ拠点病院・診察室（日替わり）

C Tの画像を、P Cに表示させる平山。

その前には緊張の面持ちのケンジ。

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る：」

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る：」

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る：」

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る：」

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る：」

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る：」

博巳は、ひとつだけ空いた席を見つめて

麻里「あの、安達さん？」

博巳「（気づいて）はい？」

麻里「ラストシーン、主人公が彼女を追いか

けたのかわからないでしよう？」

博巳「ああ。どうでしょう？」

博巳「空席を見ている博巳。ただ……」

○元のバー・表（夜）

博巳「泣き止まないでいる？」

麻里「泣き止まないでいる？」

博巳「みんな誤解してる？」

博巳「みんな誤解してる？」

博巳「みんな誤解してる？」

博巳「みんな誤解してる？」

博巳「みんな誤解してる？」

博巳「みんな誤解してる？」

博巳「みんな誤解してる？」

博巳「みんな誤解してる？」

博巳「みんな誤解してる？」

博巳「みんな誤解してる？」

○安達家のあるマンション・リビング（翌朝）

麻里「あの、安達さん？」

博巳「（気づいて）はい？」

麻里「ラストシーン、主人公が彼女を追いか

けたのかわからないでしよう？」

博巳「空席を見ている博巳。ただ……」

博巳「泣き止まないでいる？」

後藤「後藤と箱崎の前に座っている博巳。」

博巳「頭を下げている博巳。」

後藤「じゃなく面白くない。企画になつてきたところ。僕は今までの作品、全部。それに気づいた。僕は今までの作品、全部。それに気づいた。僕は今までの作品、全部。それに気づいた。」

後藤「僕は今までの作品、全部。それに気づいた。僕は今までの作品、全部。それに気づいた。」

博巳「僕は今までの作品、全部。それに気づいた。僕は今までの作品、全部。それに気づいた。」

後藤「僕は今までの作品、全部。それに気づいた。僕は今までの作品、全部。それに気づいた。」

後藤「僕は今までの作品、全部。それに気づいた。僕は今までの作品、全部。それに気づいた。」

後藤「僕は今までの作品、全部。それに気づいた。僕は今までの作品、全部。それに気づいた。」

後藤「僕は今までの作品、全部。それに気づいた。僕は今までの作品、全部。それに気づいた。」

○安達家のあるマンション・表（夕方）

堤「前に到着する。アルファードがマンション

堤「降りようとする。麻里を堤が呼び止める。

堤「あの、これを渡す堤。」

堤「プロットを渡す堤。」

麻里「お願いしたい。プロットです。主演を

○同・リビング（夕方）

プロットを渡す堤。」

プロットを渡す堤。」

プロットを渡す堤。」

プロットを渡す堤。」

プロットを渡す堤。」

○同・前の道（夕方）

とぼとぼと歩いてくる博巳。
マンションの前につく。博巳。
博巳、中に入るのを躊躇う。

○同・リビング（夕方）

麻里のスマホが着信する。

博巳からの電話だ。

麻里「電話に出る麻里。」
博巳「声：「ごめん、今まで」

○同・表前の道（夕方）

博巳「マンション前で電話している博巳。」

麻里「声：「悪かった」プロット読んだ」

○同・リビング（夕方）

博巳「声：「そう」

麻里「この続きはどうするの？」
博巳「電話が切れたよ。もう脚本も書かない」

麻里「電話が切れる。」
「何かを感じてベランダへ出る。」

「階段を見下ろす。そこには博巳の姿はない。」

○ケンジのゲイバー（日替わり）

「ほこりっぽい店内。準備をする。」

「一人再オートの準備をすすめる。」

「入り口の忙しさを準備を進めて洗。」

「入り口の忙しさを準備を進めて洗。」

「入り口の忙しさを準備を進めて洗。」

「入り口の忙しさを準備を進めて洗。」

「入り口の忙しさを準備を進めて洗。」

「入り口の忙しさを準備を進めて洗。」

麻里 指輪が入っていると、いい夫婦の日に渡された
薬指にははめてみる。
サイズがぴったりになっている。

○喫茶店（日替わり）

新人脚本家の高野が緊張の面持ちで座つて
いる。その前には、脚本を読んでいる博巳。
丁寧には一枚一枚読んでいる。

博巳（読み終わり）「すごく良くなった」

博巳「驚く高野は、喜びを噛み締めている。
「ただ、僕の脚本監修のクレジットは外

高野「（落胆）……わかりました」

博巳「あ、違うよ。脚本は本当に良かった」

博巳「偉そうなことを色々言ってたけど、結
局、僕が一番、人を描けてなかったから、ちや

高野「人と向き合ってたから」

博巳「だから、僕のクレジットなんていらな
いんだよ。無いほうがいいから」

高野「そんなこと言わないでください」

博巳「僕は安達さんの作品が好きで、脚本を
書き始めたんですけど。だから、そんなに

博巳「……」

○博巳の仕事場のアパート・室内

床に横になった博巳。
散らばった台本を見つめている。
インタビューホンを
不思議そうに立ち上がり、
プロデュースの確認する。後藤が映っている。

夜。読み終わった脚本を本棚にしまおう博巳。

複数本の脚本を本棚に戻っている。床に落ちた脚本は、少なくなっている。また

博巳「脚本は落ちてる。読み始める。から、また

一冊手に取ると、読み始める。から、また

博巳「最後の一冊を本棚に戻す博巳。」

博巳「本棚に並べられた脚本群を見つめる。」

○同・ベランダ（早朝）

ベランダに出る博巳。冷たい空気が、大きく息を吸い込む博巳。

何かが決まろうな面持ち。朝日がゆっくると昇りつつある。

○同・室内（朝）

部屋に戻る博巳はPCを開く。真っ白な画面に打ち込んでいく。

い肃々と、キーボードの上、指を動かして

○映画制作会社・打ち合わせ室（日替わり）

デスクの上に完成したプロットが置かれて

後藤「プロット、読ませていた。博巳。」

後藤「それで、」

博巳「（遮るように）後藤さん、ひとつだけ、

後藤「このプロットなんです。僕が、実は僕の経

験を元にしています。僕が、実は僕の経

になつて、妻に隠れてケアをしていたんで、す。それが、知った妻は複雑な思ひだつたので、しょうが、そのケアを手伝つてくれました。

博後 藤 脚色はほとんどしていません。僕の愚

かさも周囲の優しさも、ありのままを書

博後 内容がダメなら、この企画はやはり無しに

後 藤 誠実な頭を下げる博後。すみません

後 藤 安達さん、このプロットで脚本に着手

博 巳 いらえますか？

後 藤 品が作られるのか、楽しみになってきました

○ 博 巳の職場のパート・表（夕方）

歩いてくる博巳。郵便受け、自分のポスト

アパーメントの集合郵便受け、自分のポスト

を開ける博巳。封筒が入っている。

○ 同・室内（夕方）

封筒を開ける博巳。映画のチケットが入って

いる。十年前に博巳が初めて脚本を手

がけた。低予算映画のバイバル上映のチ

ケットだ。博巳。人間だつてこと

短文章が書かれていない。

短文章が書かれていない。

短文章が書かれていない。

短文章が書かれていない。

ケ
ン
に話しかける。劇場内から出てきて、博巳
劇場内に入ろうとしない博巳を、強引に
中へ連れて行く。麻里は、踵を返し、もと
それを送る。ケンジは、踵を返し、もと
来た道に戻る。

○博巳の仕事場のアパート・室内（夕方）
大事に保管されていたであろう映画のチ
ケットを見つめる博巳。
その目から涙が溢れる。

○名画座・前（夜・日替わり）
名画座にやってくる博巳。
ポリスタールが貼られて、十年前の映画の
ポスターがタタシを見つめる博巳は、劇場内
への足を運ぶ。

○同・劇場内
スクリーンに投影される映像。
アンパルトに住む若いカップルの別れの
シーン。演じる大きな荷物を持って出て
行く。送る男は部屋に戻って座る。
部屋に置き忘れた女物の傘。
それにも気づいた男、ただその赤い傘を見つ
め、出て来ず、ただその赤い傘を見つ
めて、エンディングが流れ始める。
上映が終わり、劇場内が明るくなる。
観客の数は少ない。劇場内が明るくなる。
その客が上がる。博巳。つたあと、しばらくし

麻博麻博麻博
里巳里巳里巳

笑「「「「「し博驚麻つま遠麻麻走て博立「との博麻立麻博
う：そ：映え：ば巳く里いたく里里る行巳ち：ぼ道巳里ち里巳が
博：っ：画？：らは麻のに走に麻探姿は。道のい。ほうへ走り出す。麻里の歩
巳主かよ`「どく息里。に追り麻す博見えない。
。演「かどう沈黙れ。立つく博巳。が見えた。
の女優がね「ただ、た？「。続いている。
「「「「「

博
巳

「との博麻立麻博
：ぼ道巳里ち里巳が
「と歩諦中す博巳見ると、劇場前の道を歩く
と歩出したか。のよう、離れていく。
博巳の足。麻里とは反対

○
同・
前
の
道

麻るそる自劇
里。の。分場内から出てくる博巳。
は。手にはピンク色の封筒が握られてい
出口を出て、外へ歩き出す。

○
同・
出
口
前
の
ホ
ー
ル

博巳「今、また脚本を書こうと思ってる。あ
なたが読んだプロットを直したんだ」
麻里「そう」
博巳「よかったら、いろいろ教えてほしい」
麻里「……」
博巳「あなたのことがかちゃんと知りたいんだ」
麻里「博巳を見つめる博巳。
博巳を見つめる麻里。」
麻里「その脚本、私が主演なんでしょうね？」
博巳「もちろん」
笑う二人は一緒に歩き出す。

おわり